


914.6
SH45
2

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 8/10 1 2 3 4 5

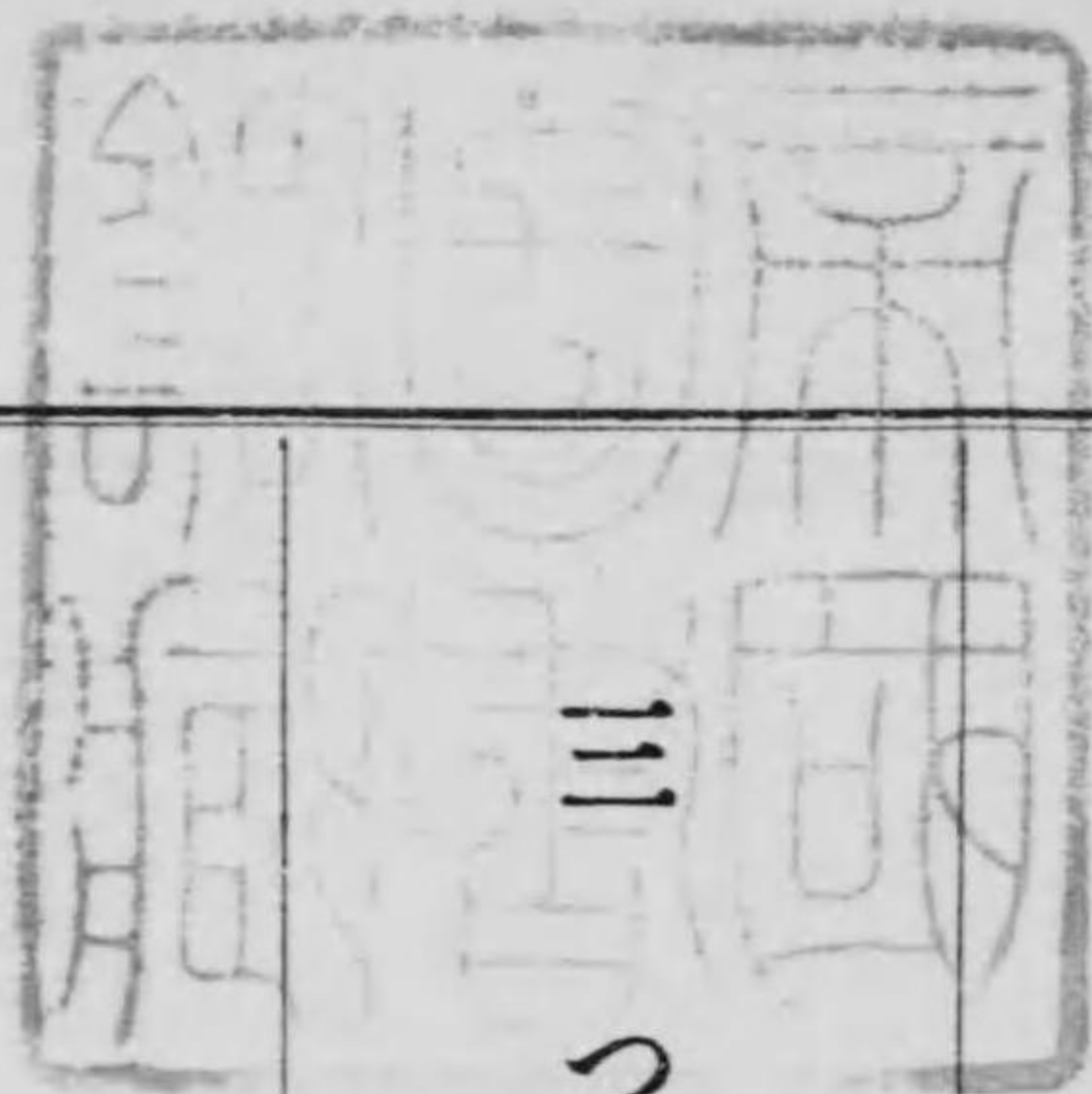
始



1521

577-37

9146  
S145-2

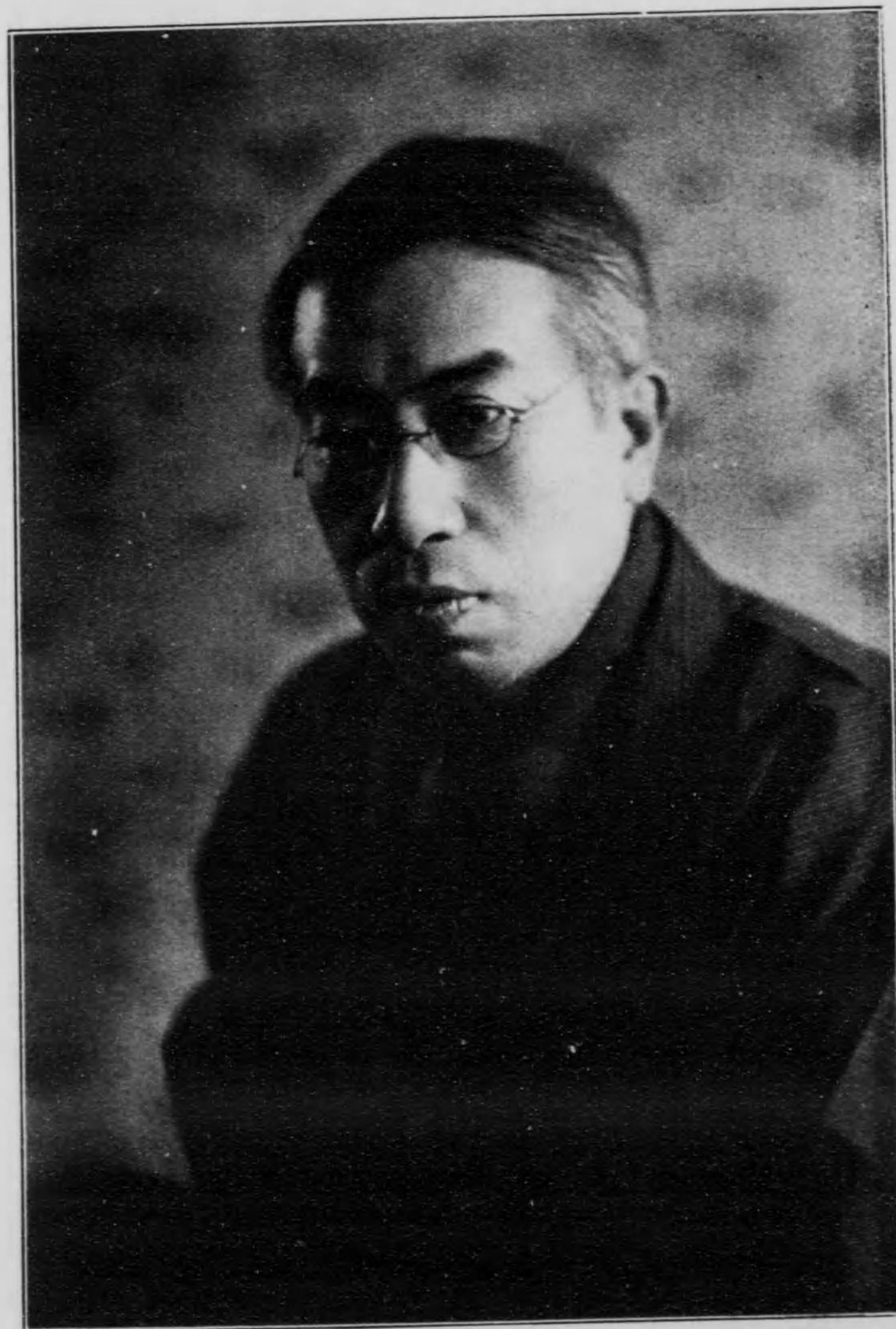


島崎藤村著

三つの感想

東京下出書店

大正  
10 12.1 3/5  
内交



"The opening power of a key ;  
the drawing power of a crook."

Blaise Pascal.



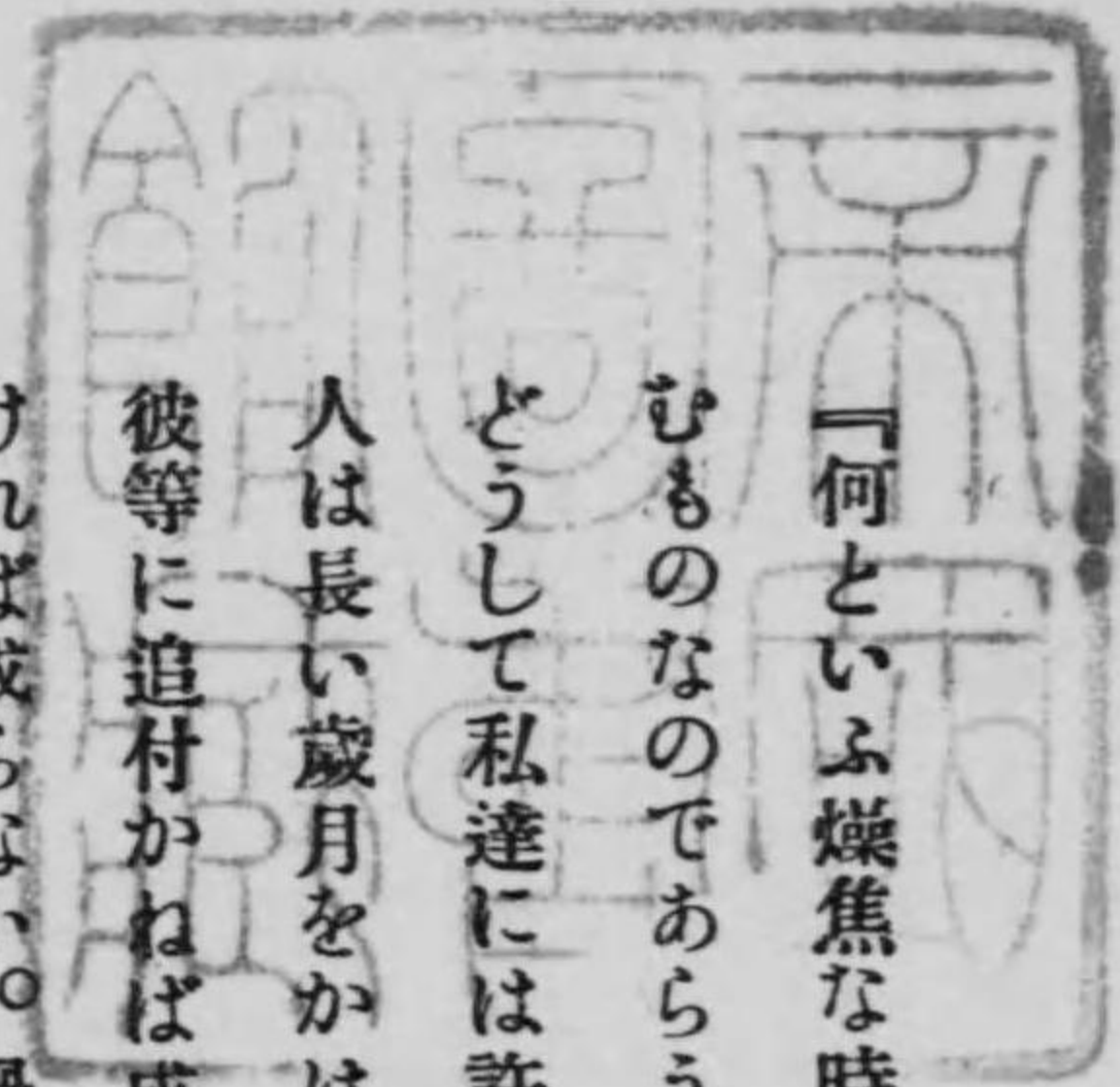
目次

- 一 ルウチンとバザロフ……………一
- 二 北村透谷二十七年忌に……………一九
- 三 トルストイの『モウバッサン論』を読む……………四七



ルウヂンミバザロフ

「何といふ燥焦な時代に私達は生れ合せたらう。この燥焦は獨り私達の苦しむものなのであらうか。一生を通じて各自の天性を盡して行くやうなことは、どうして私達には許されないのだらう。それも理のあることだ。彼等歐羅巴人は長い歲月をかけて今日の社會生活に達して居る。私達は極く短期の間に彼等に追付かねば成らない。そして彼等と同じやうに世界的な仲間入をしなければ成らない。過ぐる半世紀を振り返つて見ると、封建時代の過去のものは未だく私達の内にも外にも生きて居る。明治の維新とは言つても根深い過去のものを全く新しくすることは出来なかつた。ある意味から言へば、私達



の眼前にある多くのものは封建時代の遺物の近代化に過ぎなかつた。歐羅巴の大戦の影響を受けて漸くそれらの過去のものゝ壊れ行く時が来たのかも知れない。社会的に舊く權威のあつたものゝその權威を失ふやうな時が漸く私達の眼前にやつて来たのかも知れない。私は近頃自分等の立つ今の時代を考へて、五十年前の歐羅巴と見るのが適當かといふことによく思ひ到る。明治大正の文學の歴史から言ふと、ツルゲネエフの持てはやされた頃は既に一代以前のことである。しかしこれを社會一般の生活の上から見ると、私達はあの露西亞の小説家が「父と子」を書いた時代に漸く到達したのではないかと考へる……」

こんなことを私はこの正月元旦の朝日新聞紙上に寄せた「胸をひらけ」といふ一文の中に書いて見た。

ツルゲネエフの『父と子』を書いたのは千八百六十年だといふ。して見ると、實際は今から五十年前でなくて、六十年前にも當る。これを我國のことにして見ると、丁度萬延元年といふやうな昔に、學者で言へば安積良齋とか浮世畫師で言へば歌川國芳とかの人達が世を去らうとした頃に、露西亞の方には『父と子』のやうな小説が公けにされて多くの人がそれを感賞したといふことは一寸驚かれる。ルウヂンとかバザロフとかいふやうな人物が露西亞作家の頭腦に宿つたのは、私などの未だ生れもしない前だといふことにも驚かれる。

ツルゲネエフと言へば、私達が英譯で初めてあの露西亞の小説家を知つた頃

の青年時代の記憶と引きはなしては考へられないくらゐだ。若かつた日の友達仲間でツルゲネエフの愛讀者でないものは無かつたくらゐに、私達はあの樺色の表紙のついた二冊の『獵人の手記』なぞに讀み耽つたことを覚えて居る。私は友達と集つて『處女地』や『父と子』に就いて語り合つた青年時代の感激を今も猶あり／＼と思ひ起すことが出来る。その時の友達の言つた言葉なぞで今だに私の耳に残つて居るものもある。

斯うした青年時代からの忘れ難い記憶に加へて、私はあの露西亞の小説家が巴里に晩年を送つたといふ日のことを同じ都にあつて追想して見た特別の懐しみもある。何がなしに私はもう一度ツルゲネエフを讀んで見たくなつて、銀座へ行つた序に譯本を探して來た。『ルウヂン』は田中純君の譯であり、『父と子』の方は谷崎精二君の譯になつたのを買つて來て讀み返して見た。

今更こゝに書きつけて見るまでもなく、雄辯な天才的な一種の理想家で、しかも實行力に乏しいルウヂンの人物は多くの人に知られて居る。ツルゲネエフの描いたルウヂンを奈何なる國にも奈何なる時代にも見出し得べきある氣質のエチユウドだとはゾーギユエの言葉である。斯うして私なぞが何時までもあの人物を思ひ出すところを見ると、矢張ルウヂンには好いところがある。と見える。その好いところが絶えず人生のある問題を提供して居ると見える。さう思ひながら、譯本をあけて見た。著者は露西亞の地方にある小さな都會の方へもう一度私の心を連れて行つた。そこで逢ふ作中の人物でも、作中の光景でも、曾て一度親しみを覺えたものばかりだ。主人公のシャルムと、雄

辯と、泉のやうに湧いて来る思想と、その感化力とは、忽ちにして人を酔はしてしまふ。若い健氣な露西亞氣質の娘がその熱心な崇拜者の一人で、やがて作の女主人公だ。娘に母親がある。娘が母親の家を抜け出して来てまでも主人公に心を捧げやうとするところは、あの作中の最も興味ある部分として書かれてある。作者は娘の熱愛に酬ゆるに主人公の躊躇と冷淡と續いて起つてくる落膽を以つてして、さうした戀愛の方面から實行の力に缺けたルウヂン氣質を語らうとして居る。成程、一時は人を心酔させるほどの天才的な力があつても、結局すべての人から背き去られ、奈何なる場合にも人生の不如意を嘆息するに終つてしまふやうな、あゝいふ生涯は有り得るやうに思へる。しかし、私は今度あの作を読んで見て、ルウヂンとは斯ういふ人を描いたのかと物足らず思ふこともあつた。作の終の方に近づけば近づくほど、そ

れを思つた。矢張ルウヂンの好いところは、近代人の性格の缺陷を指摘して見せて呉れるよりも、人生の問題を絶えず提供しつゝあるところにあると思ふ。

『天才！恐らくあの男には天才があるだらう。しかし性格となると……これがあの男の災難なんだが、性格だけがあの男にないのでね……が、それはまあそれとして、僕はあの男の何處が善くつて、何處が缺けて居るか、それを話したいのだ。第一、あの男には情熱がある。これは吾々の時代には一番大切なものなんだ。……僕等は皆んな許されない程に理智的に無關心に不精になつて來てるんだ。吾々の眠つてる心を呼び醒して、冷い心を温めて呉れる人間は、どんな人間でも有難いのだ……』

と作中の人物の一人がルウヂンに就いて言つて居る。高い望みを抱きながら



も、自分自身の理想を實行するだけの力がないからと言って、さうした人間の存在を無視する権利が誰にあらうと、同じ作中の人物が言つて居る。

八

私は今こゝでツルゲネエフ作中の人物を比較して見るつもりは無い。今はルウデンからバザロフへと行くべき時代だなどといふやうなことを言はうとするつもりは猶更無い。何故ツルゲネエフがルウデンのやうな人物を描き、バザロフのやうな人物を描いたらうか。それは唯當時の若い露西亞からあゝいふ類型的な人物を見つけて来て、正直に同情をもつて描いたといふだけのことだらうか。さういふ問が私に起つて来た。

『「父と子」は思想の歴史にあるエポックを造つた書物だと言はれて居る。作家は世人の多くが臆氣に感知しながらも未だ指摘し得ざりし新精神の光景を發見し、それに動かすべからざる一つのタイプを與へたのだ。』

かういふ意味のことがヂーギエエの露西亞文學研究の中にも言つてある。

バザロフとは奈何な人か。これも今更こゝに書きつけて見るまでもないが、彼は何者をも尊敬しない人、あらゆる物を批評的な見地から見ると、奈何なる理法をも信じない人だとして、『父と子』の中に紹介してある。それがツルゲネエフによつて初めてその名を與へられたといふ『虚無主義者』だ。

私は手に入れた譯本で『父と子』をも讀返して見た。あの作の最初の方の五六十頁は誰しもが好い序幕として感嘆せずに居られないやうな、露西亞の地方生活のすぐれた描寫で始めてある。子の歸省を待受ける父も、伯父も、新

九

教育を受けて父の許に歸つて來た子息も、それから主人思ひの可憐な私生兒を抱いて居る父の妾も、實にそれらの人物を眼のあたりに近く見得るやうな感じのするほご生々と描かれて居る。どうかすると、これが千八百六十年代の露西亞か、それとも大正八九年の日本かと言ひたくなるほど、讀んで居るうちに私は新舊人物の對照を思ひ比べて幾度となく獨りほゝゑんだ。これほご主人公以外の人物はよく描いてあると思ふが、あの『ルウヂン』に感ぜらるゝやうな主人公に對する物足らなさは『父と子』にもある。バザロフのやうにあらゆる物を批評的見地から見ると『戀』と『死』との前に立たせられて行つたのは、人生の痛い皮肉だとも言ひたい。

『左様なら、君！』彼がアーカデイにかう云つた時にはもう馬車に乗つて居た。厩の屋根に並んで止つてる雌雄の鳥を指して、彼は附加へた。「あれが君

達だ。手本にしたまへ。」

「どういふ意味かね」とアーカデイが問うた。

「どういふつて、君は其れ程博物學に暗いのか、其れとも忘れたのかね、鳥は最も尊敬すべき家族的な鳥類だよ。君たちの手本だ……左様なら！」

これが友達であり弟子である人を捨てる時のバザロフの最後の別れの言葉だ。あらゆる權威を否定する時が來たと言ひたげな虚無主義者は憤りに満ちた獸のやうな死を死んで行つた。ヂーギユエはそれをギニイの詩にある『狼の死』に譬へてバザロフその人の *inhumanite* を指摘してゐる。

『父と子』の譯者があの本の序文に紹介してあるのを見ると、ツルゲネエフがあれを發表した當時、平生作者に親しくして居た友人や、作者に同情を寄せて居た多くの人々が作者に對して冷淡、寧ろ憤怒の情をあらはして居たに

引換へ、作者に反対した人々や多くの敵より反つて祝辭を述べられ、また接吻まで受けたといふことが出て居る。もしこれを新時代の戯畫だと見る人があるなら、いかにも悲しいカリカチュウルだ。それにしても作者の濃い厭世觀を掩ひ隠されないやうな氣がする。

一一

見て行くと、ルウヂンは實行のない理想家のやうであり、バザロフはそれに引換へ自己の信ずるところを貫かうとして威傷主義を排した現實家のやうであるが、しかし『父と子』を読み終つた後ではバザロフとても矢張實行の力に乏しいことが感じられる。そして私の直ぐ聯想するのは、あのツルゲネエフに『ハムレットとドン・キイホーテ』といふ名高い論文のあることだ。どう

もあのルウヂンを描きバザロフを描いた作家その人が藝術と實行、乃至は思想と實行といふやうな問題にひどく心を苦しめた人ではないかと思ふ。ツルゲネエフと言へば直ぐに藝術家を思ひ出させるやうなあの作家の内部には絶えず實行を思ふ心が往來して居たのではないかと思ふ。默然と手を拱いて、時代に對して居たやうなあの作家の苦しい心から、『ルウヂン』が生れ、『父と子』が生れ、『煙』が生れ、『處女地』が生れて來たのではないかと思ふ。一體、ツルゲネエフの物を書いたのは奈何な時代だつたらう。ゾーギユエの露西亞文學研究によると、西歐羅巴の新思想は先づ手近な獨逸あたりから露西亞の大野に流れ込んで行つたものらしい。新知識に憧憬する當時の露西亞の青年で伯林やギョツチンゲンに留學の希望を抱かないものは無かつたといふやうなことも出て居る。新しい思潮と人道的な哲學とはぐくまれ、自由

一三

な國外の空氣を吸ひ祖國に於いては何等の用途をも見出し難いやうな思想を抱きつゝ歸つて行くそれらの青年の不平を想像するに難くないとゾーギエエは言つて居る。青年時代のツルゲネエフが國の方へ歸つて行つて、西歐羅巴を見た眼でもう一度露西亞を眺め、自由主義のもとに集まる人達と交り、ヘルゼンとかバクウニンとかいふやうな人達を周圍に見出し、西歐羅巴のデモクラシイの思想もしくは社會主義の思想などが次第に高調されて行つた一派の思想家の群の中に身を置いて、バザロフのやうな眼の光つた子供を生むやうに成つて行つたのは自然のことかも知れない。千八百四十年代以後の露西亞に、二つの大きな思想上の分野の出來たことは人の知るごとくであるが、こゝに私にとつて興味の深いことは、あのツルゲネエフが西歐羅巴の文化に憧憬する自由主義の派に屬して居たのに引換へ、一方にはドストイェフスキ

イが深秘な宗教的な露西亞風の信仰と結びついたスラヴ主義もしくは國民主義ともいふべき派に屬して居たことだ。斯ういふことは、とても一口に言つてしまへることもなからう。しかし私達はツルゲネエフの革命家風な反抗心と厭世觀とは、農奴解放前後の暗い時代の背景のあることを見逃してはなるまい。それからあのドストイェフスキイの愛國心と、彼に『一文學者の手記』のあることを忘れてはなるまい。

ツルゲネエフの生れた地方のことを書いた部分は、ゾーギエエが露西亞文學研究の中の最も楽しい頁の一つだ。ツルゲネエフが故郷は、露西亞の地方の中でも南方の空の開けかゝつた位置にあるといふのも面白い。これをツルゲネエフの書いた多くの人物の底にある憧憬の精神に思ひ合せて見ても、面白いことだ。

實行を思ふ藝術家の心、それは獨りツルゲネエフのやうな藝術家のみの苦しんだ重荷であるといふことは出来ない。おそらくそれは、すべての藝術家のいつか一度は負はねばならない重荷であらう。

詩人ベギイの割合に短い生涯の中で最も熱烈な感じを起させるのは、祖國のために身をさしげるところまで行つた強い實行の精神だ。そこまで彼は藝術を捨てることが出来た。彼は今度の大戦争の始まつた年の秋に、多くの他の戦友と同じやうにギルロアの塹壕の土の中へ貴重な屍體を埋めてしまつた。これは顯著な例であるが、多くの藝術家の出發したところとその歸着したところとの著しい相違などを考へる度に、私はその徑路の偶然ではないことを

思ふ。トルストイが求めて行つたあの純一な生活にも、もつと目立ない場合で言つて見るならベエターが求めて行つたあのルネッサンスの實現的な修業地にも action といふものを思ふところまで動いて行つた藝術家の心があるのではあるまいか。これを極く手近な自分の國の方の場合で言つて見ても、晩年の長谷川二葉亭がある。

ロマンチックな精神の究まつたところに實行を思ふ心があると言つた人もある。そのあらはれて来る形式の相違こそあれ、私はすべての藝術家がいつかは生涯の中に逢着する謎ではないかと思ふ。

實行を思ふ心を現在に求め得られなかつたルウチンのやうな人は不幸だ。日常刻々の刺戟も、唯それのみでは彼に何等の意義あるものとは成らない。彼

は遠いところにあるもの、憧憬に生きなければ成らないけれども、そのために浅薄な實行家に地歩を譲らなければ成らないといふ理由が何處にあらう。ルウヂン、バザロフ、それから『處女地』の主人公なるニエジユダノフ——見て來ると、ツルゲネエフの書いた主要な人物には血あり涙ある作者の苦しむ心が語つてあると思ふ。ツルゲネエフは晩年にトルストイへ手紙を送つて『君は文學へ歸つて呉れたまへ』と言つたといふ。もう起てなくなつた死の床の上でツルゲネエフがさうした手紙を書いたかと思ふと、その短い言葉の中にも彼自身が語つてあるやうな氣がする。今は時代そのものが實行を思ふ時だらうか。それが私達の心をこんなに靜かにして置かないだらうか。あのルウヂンやバザロフのことが此節しきりに私の胸に浮んで來る。

### 北村透谷二十七回忌に

透谷が亡くなつてからも二十七年にもなる。私が初めて透谷に逢つたのは麴町三番町にあつた巖本善次氏の家の應接間で、透谷は二十五歳、私はまだ漸く二十一歳の青年であつた。當時透谷は巖本氏の主宰する『女學雜誌』に寄稿しはじめた頃であつたが、彼が特色の深い論文の最初の試みとも言ふべき『厭世詩家と女性』は早く既にその年頃に出來たものであつた。私の透谷を愛する心は、それから三年の後、彼が僅かに二十七歳で早く斯の世を去つた時まで續いて行つたばかりでなく、その心は彼が死後になつてますます深くなつて行つた。あの友人と私との縁故も深い。彼の絶筆ともいふべき

『エマルソン』(民友社出版、十二文豪の内)の評傳は未完成のままの原稿を私が引受けて整理したものであり、彼の遺稿として最初に世に公けにした『透谷集』(文學界雜誌社出版)は私が編んだり校正したりしたものであつた。たしかあの最初の集は雜誌『文學界』の同人であり編輯者であつた星野君兄弟の手で七百部を印刷し、それきり絶版としたかと思ふ。私があの人と交つたのは亡くなる前の四年間位に過ぎないが、しかしその短い間が私に取つては何か一生忘れられないものであり、透谷が死んだ後でも書いた反古だの、日記だの、種々書き残した手紙などを見る機会があつて、長い年月の間にあの友人のことを考へて見ると、掘つても掘つても盡きないやうな種々なものが後から後からと出て来るやうに思はれた。これほど私が透谷のことを忘れなうといふのも、一つは自分の年の若く心の柔かな青年時代にあの友人と知合

になつたからでもあり、一つはあの友人の書き遺したものを纏めて置かうと思ふほど深い縁故のあつたからでもあるが、就中私があの人から感化を受けたことの深かつたからであらう。彼こそはまことの天才と呼ばれるべき人であつたと思ふ。

もし露西亞のクロボトキンが『露西亞文學の現實性と理想性』を書いたやうに吾國に『日本文學の現實性と理想性』ともいふべきものを書いて呉れる人があつたら、その人は日清日露兩戰役へかけての時代を背景として、すくなくも二人の文學者の生涯を見逃すまいと思ふ。一人は二葉亭だ。今一人は透谷だ。この二人は、書いたものでも、歩いた道でも、第一その生活の基調

からして随分違つたものといふ氣はするが、意味の深い未完成のまゝで斯の世を去つたことだけは似て居る。

『大丈夫の一世に立つや必ず一の抱く所なくんばあらず。然れども抱くところのものは必ず見るべき功蹟を建立するにはあらず。建築家の役々として其業に従ふや、幾多の歳月を費して後、確かに巍乎たる樓閣を起すの算あり。然れども人間の靈魂を建築せんとするの技師に至りては、其費すところの勞力は直ちに有形の樓閣となりて、ニコライの高塔のごとく衆目を引くべきにあらず。』

これを讀む人は今から三十年も前に、これが青年の透谷によつて書かれたことを想ひ見て欲しい。當時、山路愛山がまだ血氣壯んな史論家として民友社に居た時であつた。愛山は頼山陽論の冒頭に、文學即ち事業なることを説

いて、文學は事業なるが故に尊い、山陽の文學に意味のあるのはそれが事業であるからである、世を益することもなく、人世に相渉ることもないやうな空の空な文學は事業とは言はれないといふことを説いた。透谷が起つて一撃を加へやうとしたのは、この愛山の主張に對してであつた。彼は山陽のやうな事業家以外に、別に人間の靈魂を建築しようとする技師のあることを言つて見せて、世を益することもなく人世に相渉ることもないやうに見える文學に反つてより尊い事業のあることを辯明した。その時の透谷は可成激した調子で、同じ駁論の中に次のやうなことを書いて居る。

『吾人は記憶す、人間は戦ふために生れたるを。戦ふは戦ふために戦ふにあらずして、戦ふべきものあるがために戦ふものなるを。戦ふに劍を以てするあり、筆を以てするあり、戦ふ時は必ず敵を認めて戦ふなり。筆を以てする



と剣を以てすると戦ふに於いては相異なるところなし。然れども敵とするものゝ種類によつて戦ふものゝ戦ひを異にするは當然なり。戦ふものゝ戦ひの異なるによつて勝利の趣も亦た異ならざるを得ず。戦士陣に臨みて敵に勝ち凱歌を唱へて家に歸る時、朋友は祝して勝利と言ひ、批評家は評して事業といふ。事業は尊ぶべし、勝利は尊ぶべし、然れども高大ある戦士は斯くの如く勝利を携へて歸らざることあり。彼の一生は勝利を目的として戦はず。別に大に企圖するところあり。空を撃ち虚を狙ひ、空の空なる事業をなして、戦争の中途に何れへか去ることを常とするものあるなり。』

戦ひの人としての透谷はこの一節にもよく顯はれて居る。斯ういふものを讀み返して見ると、若い透谷を眼のあたりに見る心持がする。愛山は透谷のこの駁論を讀んで一晩中よく眠らなかつたといふ話さへある。これほど彼は、

戦はうともしたし、又よく戦つた。そんなら彼のいふ空の空なる事業とは何を暗示したものであらうか。今日から見て、彼の短い生涯には奈何いふ意味があるだらうか。一體來るべき時代の早い先驅として、透谷は何を戦つたのであらうか。それには、私は簡単に彼の生涯を紹介して見たい。

透谷を語るには、どうしても彼の早い結婚生活にまで行かねばならない。

透谷のお母さんは京橋彌左衛門町の角に煙草屋の店を出して居た。透谷の亡くなつた後、私はあの二階へ上つて友人の遺した反古を調べて見たことがある。細君が取出したいくつかの葛籠の中からは、種々の反古やら、書きかけの舊い草稿やらが、部屋中一ぱいになるほど出て來た。透谷はどんな反古

でも、假令破つて捨て、しまひたいやうなものでも、自身に書いたものは皆大切に細君に仕舞はせて置いた。そんな一寸したことにも透谷の人となりが見えはれて居たが、その時私はあの友人がまだすつと若かつた頃に石坂嬢に宛てたといふ長い手紙を読んで見た。嬢はみな子さんと言つて、やがて透谷の細君になつた人だ。透谷の結婚が終生の好い伴侶を一人の異性に見出したやうな誠意から出發したことは、あの手紙が十分によくそれを證據立て、居た。それには自己の少年時代のこと飾るところなく長々と叙してあつて、まるで友人にでも宛て、自己の將來の希望を語るやうに書いてあつた。あれはめづらしい手紙だ。透谷の戀愛に多分の友情のあつたことも想像せられる。ところが斯の結婚には種々困難があつた。透谷のお母さんは、透谷自身の言葉を借りて言へば『世にも恐るべき神経質の人』で、あまりに氣質を同

じくしたやうな透谷とは相容れなかつた。お母さんの愛は兄なる透谷よりも寧ろそれほど神経質でない弟の方にあつまつて居たらしい。透谷は母子の苦い争ひを深刻に経験した人の一人だ。彼の結婚はこのお母さんに悦ばれなかつたばかりでなく、代議士としての相應な位地にあつた石坂氏からも悦ばれなかつたかと想像せられる。彼の執つた道は自由結婚だつた。その儀式はあつた。基督教の會堂で質素に行はれたとも聞いて居る。

この結婚によつて透谷は彼の周圍にあつた親しい人々を失つた。彼の始めた結婚生活はそれらの人々に對して血戦を開いたやうなものだつた。後になつて透谷の書出したものは、その舞臺が巖本氏の『女學雜誌』であつた關係からとは言へ、『厭世詩家と女性』といひ、『處女の純潔』といひ、『心機妙變を論ず』といひ、其他、兩性の間に起つて來る問題を取扱つたものゝ多いのも

決して偶然ではないと思ふ。

『大濤怒り、激浪躍るにあらずや、人心何ぞ獨り靜かなるを得む。』

この嵐は、透谷をして安い眠を貪らしめなかつたやうなこの嵐は、彼が周囲の親しい人々に對して血戦を開いた時に、早くも彼の生命の内部に起つて來たことを想像するに難くない。

それにしても透谷はまだ若かつた。この世の重荷を負ひながら、夫とし父としてのつとめを果さうとするには、彼の結婚はあまりに早かつた。彼は漸く二十四歳ぐらゐで既に一人の兒の父となつた。私が初めて彼の寓居を訪ねたのは高輪東漸寺の境内であつたが、ふうちゃんといふ女の兒の生れたのも、あの高輪の家であつたと記憶する。

艱難は早く來た。若い夫婦は貧しさとも戦はねばならなかつた。のみなら

ず彼の始めた結婚生活には稀に見る誠實が籠つて居たが、彼にはそれに耐へて行くだけの力も欠いて居た。それが彼の氣質から來て居た。あの友人の短い生涯に對して暗涙を催さしめるのも、その人世の不如意にある。

透谷は明治元年に相州小田原で生れた人だ。彼のお父さんは小田原の士族であつた。まだ透谷が小さかつた時分は、両親は彼を祖父母の手に托して置いて東京に出た。彼は十一歳の時まで小田原に居て、非常に嚴格な祖父の教育の下に成長した。祖母といふ人は温順な婦人で、少年の彼に對しても優しくあるべき筈の人だが、不幸にして實の祖母ではなく、繼祖母であつた。この祖父の非常にやかましかつたこと、祖母の彼に對する愛情の薄かつた

こと、で、後になつて彼が氣鬱病を發した一番の根本はそこから起つて來たご自白して居る。彼は明治十四年に東京へ移つて、彌左衛門町のお母さんの家から數寄屋橋側の泰明小學に通つた。彼の雅號の透谷も數寄屋橋の『すきや』から來て居る。あの泰明小學は私が少年時代に學んだ母校でもあつて、在學當時は互ひに知らなかつたが、後になつてその事を話し合つて互ひに縁故の薄くないことを思つたこともあつた。こんな少年時代の同じ記憶に繋がれて居ることは、一層あの友人と私とを結びつけたかとも思ふ。

透谷の氣鬱病は早く青年時代に彼を襲つたごもいふ。彼はそのため一月ばかりも床に就いたことがあるといふ。彼のお父さんは心配して、しばらく彼を旅に送り、思ふまゝに山野を跋涉せしめた。私が知つてからの彼は可成旅好きで、その事は彼の書いたものにも出て居るし、『飄遊は吾性なり』と言

つて見せた言葉のはじめにも残つて居るが、さうして旅行癖の素地を作つたのも、あの氣鬱病を煩つた後で初めて獨り旅を試みた時に基するともいふことである。

透谷自身の言葉を借りて言へば、彼は不羈磊落な性質を父から受け、甚だしき神経質と、強い功名心とを母から受けた。彼の神経質は感じ易いといふところを越えて、傷み易いほどの程度のものであつた。猫一匹、彼の住居の側に捨てるものがあつても、彼にはそれが氣になつて、その家も住み憂くなつたと聞いたことさへある。この神経質に加へて、何物にも拘束されることを好まなかつた親譲りともいふべき性質は、やゝもすると彼の結婚生活を暗くした。精神の自由を求めて止まなかつたやうな彼は戀愛そのものを深思するやうに成つた。『厭世詩家と女性』をはじめ『吾牢獄』等の諸篇にはその邊の深

い消息が泄らしてある。

しかし透谷はよく努めた。しばし襲つて来る貧しさの中で、彼は無名の一青年と食を分つことさへもあつた。彼はまたよく住居を變へた。『社會を以て家となさず』といふ言葉は彼にしてはじめて言へるやうな氣もする。彼は行く先に幻住の家を求めたかのやうにも見える。彼の書いたものは、論文でも何でも皆自身の生活に交渉の深い創作であつて、『鬼心非鬼心』といふものなどもあの高輪の寺の境内に住んだ頃の出來事を書いたものだ。透谷は又芝公園へ移つたが、そこは紅葉館の裏手にあたるところで、飯倉の通りへ出られる細い坂道に接した位置にあつた。土地が高燥で樹木も鬱蒼とした具合が彼の性質によく協つたといふことは、彼の書いたものにも見えて居る。あの芝公園の家は餘程氣に入つたと見え、あそこで書いたものには懐しみの多い

ものが出來た。短い瞑想の記録のやうなもので、あそこで透谷の書いたものには、私の好きなものがある。意地の悪い鴉が来て高い梢の上で啼くのを見て、皮肉屋といふものは文壇にばかり居ると思つたらこゝにも居た、といふやうなことを書きつけたものも有つたが、あゝいふ軽い氣分が持てるほどあの住居は楽しかつたと思ふ。結婚後の透谷に弟子であり知己であつたやうな一人の女友の出來たことも、軽く見逃せないやうな氣もする。彼が奥州の方へ旅をして歸つて來る頃には、その人は亡くなつた。『哀詞序』一篇は短いものであるが、その女友の死を記念するための深い悲みが寄せてある。あの奥州の旅から歸る頃から、彼は自身にも異状の起つたことを知つたと見えて、健康を回復したいとの願ひから東京の家を引拂ひ、國府津の海岸に近い前川村に移つた。前川村の古い寺は透谷が先祖の骨の埋めてある縁故の深いとこ

ろで、その部屋を假りの住居としてあつた。あの海岸では、透谷の他の時代に見られないほど静かな、半ば楽しく半ば傷いて居るやうな時が来たやうであつた。「國府津時代は楽しいござんした」、とよく細君が透谷の亡くなつて以後で、私達に話し聞かせたことを覚えて居る。私もよくあの寺を訪ねて、時には近所の娘達を集めて裁縫などを教へて居た細君を本堂の側の廣間に見かけたこともあつた。透谷が自作の『蝶の歌』などを私に読んで聞かせたのもあの寺だ。激し易く迫り易かつた透谷も、あそこでは海岸の秋を楽しんで『萬物の聲と詩人』だの、『情熱』だの、『一夕觀』だのといふものを書いた。けれども惜しいことに、その頃の透谷の身體はもう餘程弱つて居た。あの國府津時代に出来たのは、いづれも深味のあるものばかりであつたが、しかし餘り長がいはもう書けなかつた。彼は戯曲にも多くの興味を持つて居て

『五縁』『十夢』といふやうな大きな計畫を立て、その中の『悪夢』には僧の公曉を主人公にした史劇を試みかけたが、それも極僅かしか筆を着けなかつた。『エマルソン』評傳も未完全のまゝで筆を捨て、しまつた。

斯うして戦ひ疲れた透谷はもう一度彌左衛門町の煙草屋の二階へ、それ見たかと言はないばかりのお母さんの家へ歸つて行つた。精力の盡き果てた彼が半ば傷いた身體をお母さんの家へ運ぶ前には、彼はもう奈何にも仕様がなくなつたことを感じて、一切の義務といふやうなものをも捨て、しまひ、西行のやうな放浪生活を送つて見たいと考へたり、自分の子供にはもう決して文學を遣らせたくないと考へたりするやうな人であつた。早くから氣鬱病に罹つたといふ彼は、ある點まで自分の頭腦に病的なところのあるのを自覺して居て、それにうち勝たうと努めたらしくも思はれる。彼の天才は恐る

べき生の不調和から閃めき發して來たと言つてもいい。でも、彼が奈何にひるまない精神の所有者であつたかといふことは、横になつてうち震へて居るやうな床の上でも、『どうも世間の奴等是不健全でいかん』と言つて、彼の思想を不健全なりとするものを逆に不健全として嘲つて居たのでも知れる。彼は矢盡き刀折れた戦ひの人のやうに、細君にも共に死に就くことを勧めた。かといふ。その時、細君はまだ幼いふうちやんのことを言つて、夫の言葉には隨はなかつたともいふ。惨ましい死は不幸な友人を待つて居た。それから透谷に残されたものとは、いかにして潔く斯の世を辭すべきかと、その最後の方法を見出すことばかりであつた。彼は一度お母さんの家の物干場で死を急がうとして果さなかつた。最後に彼は以前の住居であつた芝公園の家へ移つた。丁度私が見舞つた時は、彼の『エマルソン』が十二文豪中の一

冊として民友社から屈いた日であつた。彼はその本を手を取つて見たくらゐで、中を開けて見る氣も無かつた程に覺えて居る。丁度五月十六日の晩の月夜に、彼は病室を脱け出して、家の周圍にある樹の下で縊れて死んだ。

『悲しき Limit は人間の四面に鐵壁を設けて、人間をして或る卑野なる生涯を脱すること能はざらしむ。鵬の大を以てしても蝸の小を以てしても同じくこの限を破ること能はざるなり。而して蝸の小を以て自らその小を知らず、鵬の大を以て自らその大を知らず、同じく限に縛せらるゝを知らず、欣然として自足するは憫れむべき自足なり。この憫れむべき自足を以て現象世界に處して快樂と幸福とに缺然たるころなしと自信するものは、淺薄なる樂天家なり。彼は狭小なる家屋の中に物質的論客と共座を同じくして、泰平を歌はんとす。歌へ、汝が泰平の歌を。』

これを書いた時分の透谷はまだ、元氣だった。しかしこの文章の中に顯れて居るやうな彼の特有な強い自意識は死の旅を急がうとする最後の時まで失はれずにあつたらうと思ふ。彼は限りない感慨をもつて斯の世に別れを告げて行つたらうと思ふ。

こんな風にして透谷の惜しい生涯は終つた。彼は誠意の籠つた戀愛をも、そこから出發した結婚生活をも、すべて疑問としてこの世に残して置いて行つた。彼の生涯は結局失敗に終つた戦ひだった。彼の亡くなつた時は、ふうちやんはまだ極幼なかつた。漸く四歳ぐらゐだつた。彼はその一人の力ない愛兒を若い未亡人の手に残した。人としての彼に取つて、これが失敗でなくて

何であらう。

しかしその慘澹とした戦ひの跡には拾つても拾つても盡きないやうな光つた形見が残つた。彼は私達と同時代にあつて、最も高く見、遠く見た人の一人だ。そして私達のために、早くもういろくゝな支度をして置いて呉れたやうな氣がする。

こゝで私は二葉亭のことを振返つて見たい。『文學は男兒畢生の事業とするに足りない。』といふ意味の言葉を殘して晩年を露西亞の旅に送つたあの二葉亭には、默然と手を拱いて、時代に對して行つたやうな趣がある。二葉亭の生涯には、藝術と實行の分裂ともいふべき悲みが味はれる。そこに空虚があ



る満されがたい空虚がある。その空虚は近代に勃興した科學的文明が藝術の世界に齎した悲みと言ふことも出来ると思ふ。透谷は二葉亭の持ったやうな『眼』を持たなかつたばかりに、二葉亭に無い力があつた。彼は二葉亭が藝術と實行との間に感じたやうな空虚を感じなかつた。

四〇

見て來ると、透谷のやうな *Passionate* な性質の人が奈何いふ方向を執つて動いて行つたかといふことが今更のやうに感ぜらるる。彼をしてさういふ方向を執らせたのも、彼の若い生命に起つて來た嵐の力だといふことが感ぜらるゝ。彼が内部の生命を論じたり、創造の力を説いたり、精神の自由を唱へたりした幾多の言説を讀み返して見ると、私は隨所にその心の芽を見つける

ことが出来るやうに思ふ。

私の友人の中でも、蒲原有明君は昔からよく透谷を認めた人の一人だ。その獨創的な素質に於いては明治年代に於ける最大の詩人として透谷に許したことがあるのも蒲原君だ。その蒲原君が透谷に就いての近頃の感想に次のやうな一節がある。『透谷は何としても惜しい文學者の一人であつた。あれだけの強烈な感情と複雑多様な素質を有しながら、それが眞に指導的精神となるべき唯一の確信に到達する機縁に觸れ得なかつたことは、まことに止むを得ぬことである。透谷には思想の動搖を統一する信念の代りに、主我的瞑想があつた、唯心自性に沈む結果は早くもその出世作たる『蓬萊曲』に豫想せられて居たと見られやう。曲中には弘誓の船が描がれてある。これらは『神曲』的ではあるが、その弘誓の船は現實から絶縁せられは實現力のない空想的施

設である。従てそれは勿論宗教的とは言はれない。透谷をして煩惱熾盛の人生を痛感することからさまたげたのは、その主我的瞑想であつた。それであるから、透谷自身の生活に於いても、それが悲惨な運命に行き詰つてしまつたのであらう。』

蒲原君は特有な冷靜をもつて、透谷に對する熱い愛惜の情を述べて居る。私はこの蒲原君の感想を讀んで近頃うれいものゝ一つと思つた。蒲原君の言ふやうな、主我的瞑想はたしかに透谷の弱點だつた。彼の生前に多くの藝術的な企圖がありながらも、それを實現するの機會もなくて、意象が未完成のまま、で終つたといふのも、いづれもその弱點からだつた。あれほどの生命觀を抱いた透谷が新しい道徳の方向を指し示したのみで、遂にそれが彼自身の統一力となるところまで、行かなかつたことは返す／＼も惜しく思ふ。實際

彼がどういふ戦ひを戦つたかは、彼の早い結婚生活が最も直接にそれを語つて居る。

透谷に尊いところは何事も本質的に見て掛らうとしたことである。

『ある宵、われ臆にあたりて横たはる。ところは海の郷、秋高く天朗らかにして、よろづの象、よろづの物、凜乎として我に迫る。恰も我が眞率ならざるを笑ふに似たり。恰も我が力なく辨なく氣なきを罵るに似たり。渠は斯くの如く我に透徹す。而して我は地上の一微物、渠に悟達することの甚だ難きは如何ぞや。』

これは彼が國府津時代に書いた「一夕觀」の一節である。『萬づの象、萬づの

物、凜乎として我に迫る、』とはいかにも詩人としての彼の面目をよく語つてある。彼は何事にもこの透徹と悟達とを期した。彼は自身にも言つて居るやうに、物に感ずることが深くて悲みに沈むことも尋常でなかつた。又、美しいものに意を傾けることも人に過ぎて多かつた。けれども彼が物に感じ、美しいものに意を傾けるといふは、物を通じ形を鑿ちてその心髓に徹しなければ休むことを知らないやうな熱意から來て居た。彼は俗韻俗調の詩人が徒らに自然の美を玩ぶことを憎んだが、その彼自身は自然の美に動されることの少いのを自ら怪しむほどの多感な詩人であつた。彼が生命の内部に突き入らうとして審美上の詮索にのみ満足せず、道德の創造性にまで考察を向けた熱心には驚かれる。『生命のないところに信仰はない、信仰のないところに道德はない、』と彼は言つて居る。この内觀が主我的な冥想に墮ちて行つたの

は彼としては止むを得なかつたことだらう。

透谷は空想の多い青年時代の初期から、政治に行かうとしたり、宗教に行かうとしたり、哲學に行かうとしたりした。彼は今の早稻田大學が専門學校と言つた時代に、政治科に居て法律を修めたこともある。一時は基督教に籍を置いて、フレンド教會から出た『平和』といふ雑誌の編輯を手傳つたこともある。彼が巖本氏と知るやうに成つたのも巖本氏が基督教派の文筆の人として後進の彼を認めたといふばかりではなく、彼の方でも當時の巖本氏が早いフェミニズムの運動に心を動かさるゝところがあつたからであらう。斯うした種々な閱歷は彼の性格の複雑を語り、一面には彼の時代の激しい動搖を語つて居る。

透谷の文學的生涯は彼の早い結婚と共に開けた。人としての彼が歩いた路

は近代の生活を考へるものにとつていろいろな暗示を與へる。彼には天才の誠實があつた。その誠實が彼を~~ま~~いて短く傷ましくはあるがしかし意味の深い生涯を送らせたと思ふ。

### トルストイの『モウパッサン論』を読む

—

トルストイの長い生涯の中でも千八百八十一年あたりは特別な時代で、彼の内部に起つて來た人生觀の改造はその時代に行はれたといふことが、彼自身によつて語られてある。

トルストイの『モウパッサン論』はその後に書かれたものだ。あの『アンナ・カレニナ』などをあけて見ると、そこには人生の悲劇をめぐる幾多の人の心が書きあらはしてある。作者は何人の心にもよく入つて行つて居る。すこしも解決を急いだやうな痕がない。あのアンナ・カレニナの作者に、それまで

全力をそそいだ前半生の藝術上の仕事は全く以前の價値を失つたやうに見えて來たといふは、容易な心の出來事とも思はれない。それにしても、近代人の生活といふものを知り悉した、トルストイほどの人が、あの晩年の道德説などに果して心からの満足を感じ得られたらうか。これは私に取つて長い間の謎であつた。随つてトルストイの『モウバッサン論』の中に書いてあることも、長い間の疑問として私の心に残つて居た。

それにもかゝはらず『モウバッサン論』は私の好きなもので、今から二十年ばかり前に初めてあの論文を読んだ時から、忘れがたい印象をうけた。それから數年の後、淺草新片町の舊居に移り住むやうに成つてからも幾度とな

く私はあれを読み返して見た。

多くのすぐれた藝術家なり思想家なりは出發點に於いてすぐれて居る。トルストイのことを思ふと殊に其感じが深い。私はあの若いトルストイによつて書かれた『コサツクス』の物語を今だに忘れることが出來ない。晩年のトルストイの過酷なくらゐる嚴格な道德説には時に私は僻易したことがあつて、殊に道德的な色彩のはなはだしい彼の『藝術論』——チェホフをして、トルストイはあまりに世の末を見過ぎたと言はしめたといふ彼の『藝術論』には感服しがたいと思ふことが随分多かつたが、それでも猶私がトルストイを愛する心の變らなかつたといふのは、一つは若いトルストイの出發點が忘れられないで、あの『少年』や、『青年』や、『コサツクス』などから受けた好い印象が何時でも私の上に働いて居たからであると思ふ。

佛蘭西の旅に行く時も、私は長いこと自分の手許にあつた英譯の『モウバツサン論』を旅の鞆の中に入れて行つた。私が三年ばかりも暮して見た巴里は曾てモウバツサンの物を書いた都會であり、私の旅窓の外を往來する男や女はあの佛蘭西の作家の書いたもの、中に出て來るやうな人達であり、私の客舎のあつたポオル・ロワイアルの町は公園一つ隔て、モウバツサンの時代に繁華な町であつたといふサン・ゼルマンの通りに續いて行つて居た。私は信州の山の上でも讀み東京の淺草でも讀んだ『モウバツサン論』をあの旅窓で取出して、それを書いたトルストイの心持を辿つて見るによかつた。

近頃になつて、漸く私には長い間の疑問を釋く時がやつて來たやうな氣も

する。私が丁度トルストイの藝術論に僻易した時の最初の印象は、それが先入主となつて、二十年も私の上に續いて居たと自分ながら氣づくやうに成つた。それで私はもう一度『モウバツサン論』を讀み直して見た。

トルストイは千八百八十一年にツルゲネエフの訪問を受けて『メエゾン・テリエー』と題する佛蘭西書を勧められたことから、あの論文を始めてある。その時、ツルゲネエフは『ある若い佛蘭西の作者』の書いたものとしてその佛蘭西書を勧めたとある。あの初のところには、『すつかり讀んで見たまへ、なか／＼悪くない』とツルゲネエフが心易い調子で話したらしいことや、この作家はヅルヂイニンの型を思出させる、なか／＼しつかりしたところがあるのみならず婦人との關係に於いてすらヅルヂイニンを思出させる、とツルゲネエフの言つたとや、さういふ話を聞いても興味を持たなかつたらしいトル

ストイ自身の心持なぞがあらはしてある。そればかりでなく、婦人に關するモウパッサンの行ひに就いて、驚くべく信じがたいやうなことまで聞かされた、さもにが／＼しい調子で書出してある。

私は二人の露西亞の文學者を眼に見るやうな心持であの初のところを讀んで行つた。ツルゲネエフの方でなれ／＼しく話しかければ話しかけるほど、トルストイがそれを迷惑顔に聞いたやうな冷たさが紙の上に浮んだ。このトルストイの冷淡は何から來たといふに、彼の内部に起りかけて居た激しい嵐から來て居た。丁度ツルゲネエフの訪問を受けて初めてモウパッサンの作物を手にした頃は、彼が藝術に對する疑ひの最もはげしくやつて來た時代であつた。

『だから、私はツルゲネエフの勸めて呉れたやうな、こんな作物には全く興

味がなかつた。でも折角持つて來て呉れたものだから、その人を悦ばすために讀んで見た。』

これほどトルストイが心の變り方も、苦しみ方もひどかつた時代だ。しかしその佛蘭西書の中にある最初の短篇、『メエゾン・テリエー』を讀んで居る中に不都合きはまる題材が扱つてあるに關らず、作者の天才を認めないわけにいかなくなつたと正直に言つてある。

トルストイの『モウパッサン論』はこの作者の天才を認めたところから出發する。彼はまことの藝術に缺くことの出來ないものとして三つの性質を擧げた。第一、作者と題材との正しい關係、即ち道德的な關係、第二、表現の的確と美(この二つは一致する)。第三、誠實、言葉をかへて言はず、扱はれた題材に對しての偽りなき愛憎の感情。トルストイに言はせると、この三つの

うちでモウバッサンには第二と第三とがあつて、全く第一のものに缺けて居る。そしてトルストイは露西亞の百姓のやうな率直でもつて、モウバッサンには自己の描いた題材に對する正しい關係、即ち道德的の關係がなかつたといふきびしい論斷を下してかゝつて居る。

しかしこの『モウバッサン論』はトルストイが晩年の『藝術論』とは違ふ。同じ道德的な色彩の濃い論文でも、書かれた氣持には可成な時の隔りのあることが感じられる。こゝにはあの藝術論のやうに作者の題材の道德的な關係が正しく明かでないものを一概にデカダンスの藝術として排斥するやうな性急な人は居ない。こゝにはワグネルの『タンホイゼル』を終りまで聴くに堪へないとして、音樂會場から飛出したといふほど一克な人も居ない。トルストイの内部にある藝術家と道德家とが二人ながら私達の前にあらはれて来る

思ひのするのが『モウバッサン論』だ。彼は他のもの、眼には映らないやうな事物を直覺する注意力がモウバッサンにあることを言ひ、自己の言はうとするものを、明白に簡素にしかも一種の魅力をもつて語り得る美しい表現力がモウバッサンにあることを言ひ、そればかりでなく作家に誠實な力がなかつたら藝術に何の効果も生じないのに、モウバッサンにはその誠實もあると言つて、これほど熱心で率直な力を生れながらの稟質と考へないわけにはいかないと褒めてある。讀んで行くと、モウバッサンのことばかりでなくて、思はずトルストイ自身の持つ天才的な力に引き入れられる思ひがする。『モウバッサン論』の忘れがたいのは、さういふトルストイの美しい性質がいかにもよく溢れて來て居るところにある。トルストイは、かたくなな人とは思はれない。



トルストイはツルゲネエフから貰つた本から『メエゾン・テリエー』の外に、幾つかの短篇を読んだ。讀む作も讀む作も、いかに男が女に通じ、女が男に通ずるかといふやうなことばかりを書いてある。『ボオルの妻』と題した短篇などになると作者の態度は無關心なばかりか、どうかすると嘲笑をもつて獸でも描き出すやうに田舎の勞働者を描いてある。かうトルストイはモウバツサンの短篇に就いて論じ續けて居る。

トルストイに言はせると、勞働者の生活と興味を理解する力の缺けて居ること、さながら半獸でゝもあるかのやうに彼等勞働者を書きあらはすことで、近時の佛蘭西の作家等ほど酷しいものはない。モウバツサンも矢張その

中の一人には泄れて居ない。そこには、きまりで鈍い獸のやうな勞働者が描かれる。人はそれを讀んで唯笑へるばかりだ。もとより佛蘭西の作家等は自國の民衆の性情には通じて居る筈だ。しかし、それを讀むものが露西亞人で、佛蘭西の百姓と一緒に住んで見たことはないまでも、佛蘭西の作家の過まつて居ること、決して佛蘭西の百姓のそんなものでないといふことをこゝに確言することは出来る。だからあの『土』(ゾラ作)のやうな小説や、モウバツサンの諸短篇に書いてあることは信じられない。丁度、土臺がなくて立つて居る美しい家屋の存在を話されても、そんな話の信じられないのと同じだ。作家は唯物質的な方面からのみ過まつた理解をして、事物の要素なる精神的方面の最も大切なところを全然閑却すればこそ、さうした藝術上の見地に大きな誤りを生ずるのだ。

これがトルストイの初めてモウパッサンの短篇を手にした時の感想であつた。一口に言へば、ツルゲネエフの勸めて呉れた若い佛蘭西の作家も、結局彼にはどうでもよかつた。どうして天才のある人達がこんな無駄な骨折をするのだらう。それを彼はツルゲネエフにも話したといふ。その後彼はモウパッサンのこともすっかり忘れてしまつたと言つてある。

## 二

ところが、このトルストイに彼の意見を一變させるやうな時が來た。それは彼がある人の勸めでモウパッサンの『女の一生』を讀んだ時からであつた。あの『女の一生』を讀んでから、彼はモウパッサンの名を著してある作なら何でも讀んで見るほどの興味を持つやうになつたと云つてゐる。

トルストイが『女の一生』に就いて讀後の感を記述したあたりは、あの論文の中でも最も楽しい頁の一つだ。「女の一生」はすぐれた小説だ。たゞにモウパッサン作中の最傑作なるのみならず、おそらくユウゴオの「レ・ミゼラブル」以後、佛蘭西小説の最も良いものであらう。』トルストイの口から斯うした感嘆の言葉が出て來るやうになつた。彼はほめても、ほめても、ほめきれないやうな調子で、天才の著しい力がその書の中に感知し得られることを云ひ、そこに描かれた人生には全く新しい姿相を看取する作者の力のあることを云ひ、まことの藝術の作品に缺くべからざるものとして彼の數へた三つの性質は殆んどそれが同じ程度で『女の一生』に結びついて居ると云つてある。彼はわざ／＼『自分の見るところでは』といふ言葉まで添へて、形式の美はしさから云つても、これほど高い調子の完成はいかなる他の佛蘭西の散文家によつても達し得られなかつたものだとも云つてある。作者は愛すべきも

のを深く愛し、憎むべきものを深く憎んでこの作を成してゐる、そこがこの物語の中の出来事も人物もすべて *life-like* で忘れ難い所以であると云つてゐる。

『女の一生』にトルストイの見つけた作者は、最早彼が最初に手にした書物からモウパッサンを想像したやうな、善悪の區別を知りもしなければ又知らうとも思はないやうな諧謔家ではなかつた。深くも人生に探り入つて、そこに自己の道を發見し初めた一個の眞面目な人として彼の眼に映じた。

『女の一生』について、トルストイの讀んだ次の小説は『ベル・アミー』であつたことが、『モウパッサン論』の中に出て来る。『ベル・アミー』ははなはだ

曖昧な書物だとトルストイは云つてゐるが、それでも彼は大體に於いて『女の一生』と同じやうな、眞摯な觀念と感情との底を流れる作と見て居る、『女の一生』では、彼は作者に代つて、『ごうしてこんな佳人が零落させられたらう、その原因は何處にあるだらう』と問はうとして居る。それか、又、『ベル・アミー』の方では、『一切の清くて善良なものは私達の社會に滅びた、滅びつゝある。何故といふにこの社會が腐爛して、不健全で、恐ろしいものであるからである。』と答へようとしてゐる。彼はあの『ベル・アミー』の終の章の結婚のくだりを擧げて作者の意圖が驚くべき力で迫つて來ると云つてゐる。しかしトルストイは『ベル・アミー』以後のモウパッサンの長篇小説に失望した。それを彼は作者が人生に對する道德的關係の混濁に歸した。此の現象を理解する力は、『モン・トリオル』あたりの作になると漸く動搖し始め、最

後の長篇『ノオトル・ガアル』では全くその力が朦朧としたものと成つてしまつたと云つてある。トルストイに云はせると『モン・トリオル』を読む者は作者の意圖のいづこにあるかを知らない。作者はあの主人公のボオルが生活の一切の空しさ卑しさを示さうとして居るのか、それともあの主人公のやうに生きることの奈何に愉快で容易であるかを示さうとして居るのか、その差別をすら知るに苦しむ。これは明かに作者の冷淡と、焦燥と、作爲に過ぎたのと、就中人生に對する作者が正しい關係の缺乏を語るなのであると。

これほど『モウバツサン論』には作者に道德を求め心強い。私はずつと以外にあの論文を読んで見た時から、トルストイの求めるものに就いて種々

な疑ひを起すやうに成つた。假りに『女の一生』の作者が最初から道德的な意圖をもつて居て、それで稿を起したとしたら、あの作の効果は奈何なものだらうモウバツサンには天才の誠實があつた。その誠實は、トルストイをしてユウゴオの『レ・ミゼラブル』以後佛蘭西が生んだ小説の最もすぐれたのであるとまで感賞せしめたほどのまことの藝術の作品を成したそれで澤山ではなにか。モウバツサンが最後の長篇で『女の一生』ほど人を動かす力がないとしたら、それは作者の精神の衰へに歸すべきで、人生の全い姿に滲透するところまで作者の力の至らなかつたからではなからうか。強いて作者に向つて、それほど道德を求める必要があるだらうか。斯うした疑問が、以前あの『モウバツサン論』を読む度に、私の胸によく起り／＼した。

一體モウバツサンは唯如實にこの人生の姿を描いた人だらうか。もし佛蘭西

に純な感じのする寫實家を求めるならば、バルザックなぞこそその人ではなからうかと思ふ。バルザックの創めたものは随分混り氣の多いもので、いろいろな分子が包まれて居るといふ氣もするが、その煩瑣で複雑で、幼稚とも言へば言へるほどの初期の寫實的な文學の中から清い源泉の流れて來て居ることは否まれない。あのドストイエフスキイがバルザックに負ふところの多かつたといふのも不思議はない。そこへ行くとフロオベルやモウバツサンモウバツサンの創めたものは違ふ。作家としてのモウバツサンが現實に肉薄する力の奈何に破壊的であるかは、バルザックあたりに比べて見るとよく分る。モウバツサンモウバツサンの態度は無關心かも知れないが、その無關心は深刻な諷刺か皮肉でなければ表現の目的を達し得られないやうな悲痛な性質のものだ。試みに『女の一生』の女の主人公のやうな婦人が奈何なる無漸な位置に立たせられ、『ベ

ル・アミー』の主人公のやうな男が奈何にこの世の勝利者であるかを味ひ見るならば、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。モウバツサンがバルザックのやうな素直な寫實家でないことを考へるものに取つては、どうしても彼の濃い厭世觀を見のがすわけにはいかない。

ユウゴオからフロオベルにいたる時代の多くの佛蘭西人が自國に失望した心は、實に佛蘭西の革命の悲惨な結果に胚胎するといふ。ブウルジエの『現代心理論集』にはその邊の消息が傳へてある。より好き社會を實現しようとして企てられた舊い社會の破壊は、反つて意外な決果を人の心に齎した。多くの佛蘭西人は自國に失望して、遠い國外の空へと憧憬の心を馳せた。彼等

の心は英吉利から獨逸へ、獨逸から西班牙へ、その他遠く印度や支那の東洋の空までもさまよつた。彼等は精神の飄泊者であつた。これが佛蘭西のエキゾチズムであつて、その影響するところはひとり文學の上にも止まらなかつた。さう思つて見て來ると、政治にも、教育にも、宗教にも、何一つ心を満すに足りるものゝなかつたらしいフロオベールのやうな作家の生れた當時の社會の空氣と、その空氣の暗さも想ひやられる。フロオベールの創めた文學は實に彼の苦惱と反抗的な精神とから出發したかの趣がある。そしてモウパッサンはこのフロオベールを師とも友ともした人だ。トルストイがその『モウパッサン論』に、作者の人生に對する道德的關係の缺乏のみを言つて、さういふ關係を無視するほど反抗的であつた作者の内部に觸れるところの少いのは物足りない。

こんなことを胸に浮べながら、私はあの論文を讀みつゞけた。

トルストイは、何故に『女の一生』の作者が生現象を理解する力の次第に混濁して行つたかを尋ねて、それを主に外的な原因に歸して居る。彼はモウパッサンの流行作者として世に認められるやうに成つてから確かにその混濁が始まつたのだと言ひ、いかなる名高い作者でもさういふ誘惑の犠牲と成り易いのに、ましてモウパッサンのやうなチャームのある作者のことだ、といふ風に言つてある。彼は言葉を繼いで、一方には最初の長篇小説の成效があり、新聞雜誌の評判があり、社會殊に婦人の阿諛があり、一方には作品の價値そのものを問ふよりも作者の署名がありさへすれば好いといふやうな出版業者

の酷しい要求がある。かうした誘惑はモウパッサンのやうな作者を驅つて、作中の人物の愛すべきものを愛し憎むべきものを憎むといふ心を失はせ、たゞいゝ氣に入つたとか入らないとかの出来心で筆を執らせるやうに成ると言つてある。

トルストイは又、『ベル・アミー』を書いた後のモウパッサンのことを言つて當時に起つて來た新説のために支配せられたのだといふ風にも見て居る。その新説とは、藝術に正と不正との明かな概念を不必要とするばかりでなく、寧ろその反對に、藝術家は一切の道德的な問題を度外視しなければ成らないといふにある。その説を主張する人に隨へば、藝術家は如實にこの生を再現すれば足りる。美感を満足させれば足りる。何が道德的で、何が非道德的であるかといふやうなことを思考するのは、藝術家の仕事ではないのだといふ

に歸着する。美の尊重、殊に婦人の肉體美の尊重などがそこから起つて來る。モウパッサンの周圍にある藝術家仲間——畫家、彫刻家、小説家、詩人が、さういふ説を主張したばかりでなく、來るべき時代の教師なる哲學者までがそれを主張した。かうトルストイは言つた後で、名高いルナンのやうな人が婦人美を解しないといふことのために基督教を非難したと言ひ、『基層教起原史』中の一節を引いてそれを證據立てようとした。

そこでトルストイはモウパッサンのために斯う言つて居る。もしモウパッサンが普通の肉慾小説を書く才人なら、その作品は周圍の人達の主張のために全然支配されてしまつたかも知れない。けれどもモウパッサンには天才があつた。彼は要素から事物を見た。だから無意識のうちに眞理を發見した。モウパッサンの作品を見ると、作者の同情が絶えず動搖して居て、ある時は正

しくないものを正しいとしたり、ある時は正しいものを正しいとしたりして居るが、その理由はまさにこれだ。モウパッサンの天才が意識なしに流れて居るやうな短篇のあるものになると實にすぐれたものがあると言つてある。

讀んで行くと、モウパッサンの天才を愛するトルストイの心情が紙の上に溢れて居るやうな思ひをさせる。確かにトルストイには他の長處を愛する美はしいところがある。そこがまた、あの論文を讀んで居るうちに、きびしい道徳的の批判が加へてあるに關らず、私の親しみを覺える所以でもある。

トルストイの『モウパッサン論』は終に近づくほど楽しい。今度讀み返して見て、殊に私はそれを感じたどんな風に『女の一生』の作者がトルストイの眼に映じたか、それを知るにはどうしてもあの論文の終まで讀んで見ねばならない。

## 三

モウパッサンが最後に到達した境地は、私達にとつても興味の深いものである。その一面はより深く實在に滲透しようとする感覺的な幻想であり、その一面はさまざまな人生の經驗と日常生活の平凡無變化とから起つて來る精神の寂寥である。

トルストイがモウパッサンの最良の書として先づ『女の一生』をあげ、最後に『水の上』をあげたのはうれしい。モウパッサンを好むものでも、好まないものでも、おそらくこのトルストイの意見に一致しないものはなからう。そこでトルストイがごんな風に『水の上』を書いたモウパッサンを見てゐるかといふに、力強い道徳的成長がその最後の文學活動の期間に於いて認められることを言つてある。たゞに肉的な戀愛を黜くることが斯の作者の道徳的



な成長を意味するばかりでなく、より高き道徳的要求から作者が、人生に訴へた一切の言葉でそれを知ることが出来ること云つてある。このトルストイに云はせると、『水の上』の作者はたゞに肉慾的なアムウルに於いてのみ人間の獸性と合理性との要求の間に横たはる矛盾をみたばかりではない。作者は實に世界の組織の上にその矛盾をみたのだ。物質的な世界は作者にとつて到底最善の世界ではなかつた。その不合理、その醜惡、その不調子は、到底作者の理性と愛との要求を満足せしめなかつた。作者はある他の世界の存在を感知するやうになつて行つたのだ。

トルストイは最もモウバツサンの心を苦しめたものとして、人間の寂寥、精神的寂寥の傷ましい状態を指摘した。この寂寥が人と人との間に、殊に親しいものゝ間に見出されるほど耐へがたいことはない。この寂寥を驅逐する

ものは何か。人と人との間に横たはるこの障壁を絶滅するものは何か。愛だ。所謂婦人の愛ではなくて、純な靈的な愛だ。斯う自ら問ひ、自ら答へて居る。そしてモウバツサンの求めるものも、これに外ならないと言つて居る。トルストイは更に言葉を繼いで、『水の上』の作者は自ら求めて居たものに名を與へることが出来なかつた。しかし作者があつた恐ろしい寂寥に對して示したやうな言ひあらはし難い懊惱には、たゞ唇ばかりで發音する千百の説教にも勝つて、強く人の心の奥に響くほど誠實なものがあると言つてゐる。『水の上』の作者の周圍には恐ろしいほど不道徳な空氣があつたのだ。その空氣が氣息のつまるほど濃く作者を取りまいてゐたのだ。ひとりあの作者には天才の力があつて、その異常な光の輝くものがあつて、世と戦ひ、周圍と戦ひ殆んど自由な空氣を呼吸し得るところまで、近く行つたのだ。作者はその戦ひの途

中で斃れたのだ。そこにモウパッサンの生涯の悲劇がある。

斯の見地から、トルストイはモウパッサンを論じてゐる。彼は『女の一生』や『水の上』の作者が終に生涯の悲劇的な危機に到達したことを言ひ、その危機とは作者を圍繞する人生の虚偽と作者の自覺し始めた眞生活との間に激しい抗争の起つた時であることを言ひ、靈的な誕生の初聲がすでに、彼に聞かれることを言つて居る。トルストイはあの論文の終のところ、作者としてのモウパッサンの全生涯を振り返つて見て居る。そして、モウパッサンのすぐれた作品の中でも殊に短篇の好いものに書きあらはしてあるのは、この生れ出づる悩みであつたといふ結論に達して居る。

『もしモウパッサンがあゝの生れ出づる悩みの中に死去しなかつたとしたら、あれから更に生れたとしたら、彼は世を益するやうな幾多の大作を私達に與

へたらう。しかし彼があゝの悩みの中で私達に與へたものだけでも澤山だ。だから私達に與れたものに對しても、この力強い誠實な人に感謝しようではないか。』かういふ意味の言葉であの論文が結んである。

私達はいたづらに末節に拘泥しないで、あゝいふ論文をよまねばならない。だが、道徳家めいたトルストイの口吻に接すると、その方に煩はされて兎角末節に拘泥し易い。そして、假りにもモウパッサンがあゝの生れ出づる悩みの中に死去しなかつたとしても、あれから更に生れたとしても、あのモウパッサンの求めたものが果してトルストイの言ふやうな solutions に満足したらうか奈何かと云ひたくなる。

たゞ抽象的に唱へられる道德ほどこの世に恐ろしいものはない。さういふ道德に何の生命もない。トルストイの言ふ道德がそんな抽象的に唱へられたものでないことは、いかに彼がモウバッサンの惱みに同感し、『水の上』にあらはれてゐるやうな人間の寂寥に、精神的な寂寥に心をひかれて居るかをみればかりでも分る。それどころか、彼くらゐ抽象的に道德の唱へられるのを恐れた人もめづらしい、彼くらゐ隣人を愛することの奈何に難いかを知つて居た人もめづらしいと思ふ。

それにも關らず、ずつと以前に私はあの『モウバッサン論』をあげて見た時から、一種の反感なしに讀み終ることの出来なかつたのは奈何いふわけだらう。私はトルストイが天才としてのモウバッサンの誠實を認めたことに深く心をひかれながら、その道德的な文字にはいつでも眼をつぶりたかつた。こ

れほどの私の反感は何處から來たのか。

さういふ私は、舊い道德に反抗することはかりを知つて、新しい道德の曙光さへも認めることの出来なかつたやうな、不幸な時代に成長した。私の周囲は、眞に隣人を愛して見たこともなくて、たゞ抽象的に道德を説くやうな恐ろしい聲で満たされて居た。斯うした聲ほど私に反感を起させるものはなかつた。私は他の學友と同じやうに、反抗に繼ぐに反抗を以てした。心も柔く感じ易かつた自分の青年時代を斯の反抗のうちに過したことは、長く私の生涯に影響せずには置かなかつたと思ふ。これがそもく、トルストイのやうな人の書いたものに接する場合にも、道德的な見解とさへ云へば一概に片意地なものに思はせ、一種の反感なしには讀み終ることの出来なかつた理由である。近代の生活といふものを知り盡したトルストイほどの人が奈何してあの道德

説に満足することが出来たらうか、と私の心に疑はせくした理由もまたそこにある。

しかし私も今度ほどの親しみをもつてあの『モウバッサン論』を読み返して見たためしはない。

『モウバッサンの如きは、彼自身の眼をもつて、あるがまゝに事物を読み、その意義を読み、到底他の窺ひしらざる人生の矛盾を読み得た稀な人だ。』

この意味のことをトルストイはあの論文の中に述べて居るが、私はこの『稀な人』をトルストイ自身の内にも讀まうと思ふやうになつた。彼が道德の主張も、肉慾の否定も、基督教的な禁慾説も——更に云へば、彼の求めたやう

な solutions の一切は、彼が自分の身に苦しみぬいた人生の矛盾と決して別物でないことを思ふやうになつた。

『水の上』を書いたモウバッサンの心——私は吉江君の譯したものから、その一節をこゝに引いてみたい。

『人々が三十歳もの年配になると、もう總てが彼等にとつてはおしまひである。彼等は何を豫期することが出来よう。何も彼等の興味をひくものは残されて居ない。彼等は吾々人間の貧弱な快樂の一通りを盡してしまつたのである。』

この正直な物の言ひ方で、モウバッサンは平凡無味な生活に厭はしい倦怠を

味はずにゐられる人の幸福であることを言ひ、『毎日同じ家具の中で同じ身振をして同じ仕事に取掛り、そして同じ地平線の前へ、同じ空の下へ、同じ街路へ出かけて行つて、そこで同じ顔や、同じ動物に出逢つてゐられる強さを持つ人』の幸福であることを云ひ、『この少しの變化もしない、全く怠屈な事柄を認めて、そして言ひようのない怠はしさを味はずに居られる人』の幸福であることを言つて居る。恐ろしい倦怠だ。そして『水の上』の作者は最早科學や藝術の愛にもほとく何等の興味も持てなかつたらしい人だ。それはご作者は彼自身の中に幽閉せられ、禁錮せられてしまつた人だ。

『水の上』の作者が抱いた孤獨の惱ましい恐怖は、なかく普通のアンニエイトといふ言葉ぐらゐであらばせない程度のものだ。

『吾々めいくは、自分の周圍に空虚を感じ、測りしれない深い底の方で自

分の心が鼓動し、思想が悶えて居ることを感じ、そして狂人のやうに兩腕を擴げ、熱した唇をして、何人かを抱かうと思つてうろつき廻る。そして彼は自分が獨りで居るといふことを感じないばかりに、知りもしないで、見もしないで、了解もしないで、右に、左に、滅茶苦茶に抱き著く。彼は何人かと握手した刹那から、斯う云ふやうに思はれる。「さあ、お前はもう俺のものである。お前はお前自身の、お前の生命の、お前の考へのお前の時の幾分を俺に負うてゐる。」そしてこれが爲に多くの人は互によく知り合ひもしないで自分等だけ友人と思ふのである……彼等は孤獨でゐないためには、何人かに心を向けなくてはならない。彼等の愛情は、友情としてか、或は戀としてか費されなくてはならない。併しさうするには、是非ともある孔隙が見出されなくてはならない。で、彼等は愛情を語り合ひ、それを誓ひ、それに狂し、

昨夜見つけたばかりのある知らない心に自分の全心を注ぎかけ、不圖出逢つて悦しさうな顔をしてある者の魂に自分の全霊を注ぎかける。そして互ひに結び付かうとするこの惶しさから、總ての意外な事件や、間違ひや、誤解や、及び人生の芝居やが持ち上る……』

何といふ寂寞な精神の光景だらう。この寂寞から逃れようとして、モウバツサンが自分の心をなぐさめようとしたのは彼の晩年の著しい傾向とも見るべき感覺的な幻想であつたことを想像するに難くない。實に『水の上』一篇は、精神の統一を欲して、それが得られない人のあげた苦しい叫びだ。

こんな生涯の危機が、あの『アンナ・カレニナ』の作者の上にもやつて来たか奈何か、それは私の言ひ得る限りでない。それにしても千八百八十一年あたりから以後のトルストイが何か別の道を歩き出した人のやうに見えて、それ

まで彼が全力を傾けた藝術上の仕事も全く以前の價値を失ふやうに見えて来たと自白して居るのに徴しても、そこまで彼を導いて来たものは近代人の心に見出される道德的寂寥ではなかつたらうかと惡想せられる。

斯う思つて來ると、假令トルストイの求めて行つれ解決が宗教の奉仕のためにあるやうな狭苦しさを感じさせるにしても、私はそれを世にありふれた道德説と同じやうには考へられなくなつて來た。人世の濁流に投ずる清い源泉として、あの一見時代錯誤のやうな原始的な宗教の精神への復歸や、道德の主張や、肉慾の否定や、基督教的な禁慾説などの唱へられた意味を考へずにはゐられなくなつて來た。矢張『モウバツサン論』を書いたトルストイは、

あの『コサツクス』の物語なぞから出發した近代人だ。

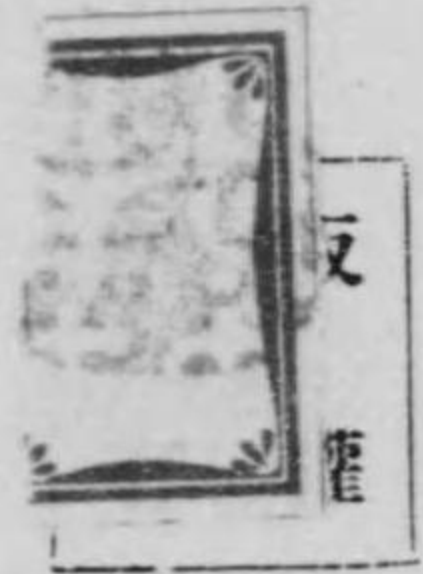
私はこの感想で、長い間の謎として自分の心に残つて居た疑問をすつかり解き得たとも思へない。しかし私は今度あの『モウバッサン論』をよみ返して見て、多年自分に抱いて居た反感を忘れて行くやうになつた。むしろイブセンドや、ストリンベルヒや、それからエレン・ケイの指し示したやうな新しい道徳の方向に結びつけてみて、一見正反對の位置にあるやうなトルストイの求めたものも、人と人との間の新たな關係、道徳的な關係であることを思ふやうになつた。そして來るべき時代のための序の曲を奏して行つたやうなトルスネイの長い生涯をも想像するやうになつた。

『モウバッサンが彼の作品の最も好いものに、殊に彼の短篇の中に書きあら

はしたものは、この生れ出づる惱みなのである。』と云つたトルストイの言葉は味ひが深い。

大正十年十一月二十八日印刷  
大正十年十二月十五日發行

刷行 三つの感想集附  
定價 六拾錢



新學生會叢書  
第十篇

著者 島崎春樹

發行所 東京青山原宿百七十四番地十六號  
下出義雄

印刷所 東京市京橋區新金六町十二番地  
望月精次

發行所

東京青山原宿  
百七十四番地十六號

下出書店

電話長芝六三六九番  
振替東京五五六〇七番

英文通信社印刷所印行



終

